



イタリアにおける ヴィラ・庭園・風景の統合

第6回(最終回)

オルティ・ファルネジアーニ——都市を眺める展望台

野口昌夫 | 東京藝術大学美術学部建築科 教授

大島 碧 | 東京藝術大学美術学部建築科 教育研究助手



野口

大島

イタリアのルネサンス期・マニエリスム期のヴィラにおけるスケール横断的空間構成手法である「風景の統合」(インテグラツィオーネ・シェニカ)の理論とその実例を紹介してきた。「風景の統合」は、ルネサンス期に起こったヴィレツジャトゥーラ(休暇を田園で過ごすこと)の思想を背景に成立し、有力者たちは1年のうち4カ月ほどの期間をそれぞれのヴィラで過ごしていた。ヴィラは、地形の高低差を利用しながら、自分の都市と他のヴィラを眺められる好地点に点在し、やがて相互視認のシステムに発展する。見ることは、その対象を所有することを暗に示し、ヴィラのシークエンスに組み込まれた眺望は、体験者の野望と支配の表現となった。

本連載では、こうした眺望を中心とした空間構成のプロトタイプとなるヴィラ・メディチ・フィエゾレから始まり、カプラローラのヴィラ・ファルネーゼとカジノ・ファルネーゼではヴィニョーラによる錯視と暗喩を用いたより技巧的な手法を見てきた。その後、舞台は都市ローマへ移り、第5回ではローマの市壁外側に位置したヴィラ・ジュリアを紹介した。ここでの眺望は、都市を見渡すものではなく、半地下の空間から空を見上げることにより成立していた。この第6回では、ローマのパラティーノの丘に位置するオルティ・ファルネジアーニを取り上げる。ここでついにヴィラは居住機能を失い、眺望と観察を楽しむための展望台としての機能と、それを演出する高度な軸線と動線のシステムだけが残った。

都市の内部に位置するヴィラ

1539～79年、パラティーノの丘にファルネーゼ家の兄弟、アレッサンドロとラヌッチオがこのヴィラのための土地を購入した。2人はどちらも古代研究に熱を上げていた。枢機卿アレッサンドロ(1520-89)はカンチレリアを公邸とし、すでにローマ郊外にいくつかの邸宅(カ

ポディモンテやグラドーリ)をもっていた。1557年以後、アレッサンドロはカプラローラのヴィラ・ファルネーゼの建設をヴィニョーラに依頼する。

一方、ラヌッチオのローマでの邸宅はパラツォ・ファルネーゼであり、田園の邸宅としては、都市南のアルバーノ丘陵にあるフラスカーティに小さなヴィラ・ヴェッキア(後にヴィニョーラにより改築)をもっていた。

このパラティーノの丘の庭園は、オルティ(Horti)という語で表されていた。それは郊外のヴィラに対して都市内の庭園を意味する。1882年にはヴィラのほとんどが廃墟と化し、その後は鳥小屋だけが再建され、現在に至る。オルティ・ファルネジアーニに携わった建築家について、ファン・デル・レーは、ヴィニョーラとジャコモ・デル・ドゥカ(1520-1601)であるとし、ドゥカが建築家として従事した2つのヴィラ、パニャリアのヴィラ・ランテ(1560-87)とカプラローラのカジノ・ファルネーゼ(1584-86)との類似性を指摘している。また、ヴィニョーラによるオルティ・ファルネジアーニの半円形の中庭とヴィラ・ジュリアのニンフェウムとの類似性をも指摘している。

純粋な娯楽の場

オルティ・ファルネジアーニはフォロ・ロマーノの遺跡を取り込んだヴィラである[図1]。ローマの市壁内のほぼ中心に位置し、所有者であるファルネーゼ家の兄弟アレッサンドロとラヌッチオが、当時没頭していた古代の研究を楽しむためのヴィラとして設計された。

ルートには巧妙な見え隠れの仕組みが用いられ、行きと帰りの道が交差しない立体的なつくりになっている[図2, 3]。このねじれたループ状の動線計画の中にジャルディーノ・セグレートが配置されている。空間構成の中で最も重要な場面は、眺望に向かって斜めに開いた

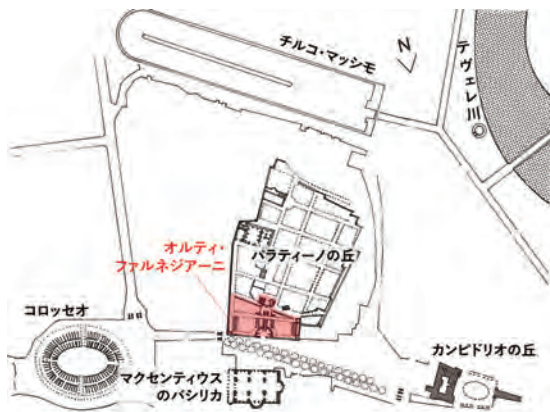


図1 オルティ・ファルネジアーニ配置図 (P.ファン・デル・レー、G.スミンク、C.ステーンベルヘン共著、野口昌夫訳『イタリアのヴィラと庭園』鹿島出版会、1997より著者作成)

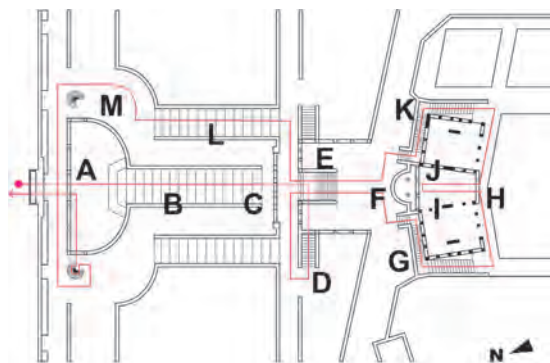


図3 オルティ・ファルネジアーニ平面図 (著者作成)

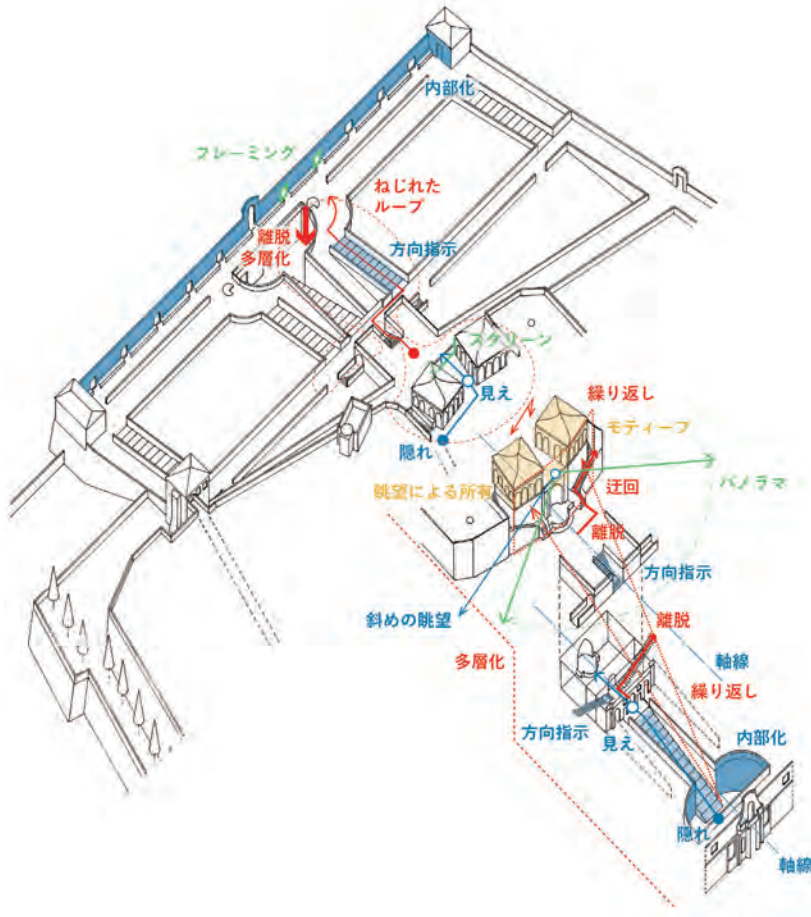


図2 オルティ・ファルネジアーニ アクソメ図 (前掲書、1997より著者作成)

一対の鳥小屋に挟まれたバルコニーから見るマクセンティウスのバシリカへの眺めである。それは312年に建設された巨大な公会堂で、議事堂、裁判所、会議場として使用された。さらに、バルコニーの端まで行くと、右手にコロッセオが遠望できる。つまり、このヴィラには居住の機能はなく、バルコニーは遺跡とその背景の都市への眺めを純粋に楽しむための展望台として設計されたのである。

シークエンス

当初は周囲のローマ時代の廃墟を取り込みながら設計されたヴィラだったが、今日ではヴィラそのものが遺構となり、周囲の廃墟と一体化したような姿になっている。グロッタや再建された鳥小屋など、特徴的な要素が残っているため、いくつかの眺望やシークエンスの一部は確認することができる。一方、ジャルディーノ・セグレートや入口のテアトロなど、当初のいくつかの重要なエレメントが失われており、ルート本来の構造を観察することはできない。

正門は、マクセンティウスのバシリカのすぐ手前であった。建物は4つのレベル(テアトロ、ジャルディーノ・セグレート、広場、バルコニー)からなり、ジャルディーノ・セグレートと広場を中間のレベルで細い通路がつないでいる。

一番低いレベルにあるテアトロからグロッタにアクセスし、そこか

ら3番目のレベル(広場)にアクセスする。広場からは鳥小屋の周りを迂回するように上層のバルコニーへ向かう。最後にバルコニーから下って、正門のひとつ上のレベルにあるジャルディーノ・セグレートに到着する。

じつは、テアトロとジャルディーノ・セグレートは行き来できるようになっていたようだが、テアトロからグロッタへの強い方向指示があること、進行方向の背後にジャルディーノ・セグレートが位置していることなどから、来訪者はバルコニーから今来た道を眺めるまで、アクセスの方法に気づかない仕掛けになっている [図4]。



図4 オルティ・ファルネジアーニ外観



写真1 バルコニーからテアトロの入口を見下ろす(1865年当時)



写真2 斜路へ至る階段



写真3(左) 斜路

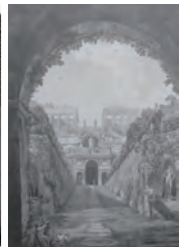


図5(右) オルティ・ファルネジアーニ 斜路



写真8 広場に至る階段



写真9 広場、上部は一对の鳥小屋とバルコニー



写真10 展望台に至る階段①



写真15 マクセンティウスのバシリカの眺め



写真16 コロッセオの眺め

A…正門をくぐると、半円形のテアトロに出る。丘の頂上にある一对の鳥小屋が見え、鮮やかな色彩の鳥が来訪者を惹きつける【写真1】。

B…軸線上の斜路を上る【写真2、3、図5】。

C…グロッタと噴水のある半屋内の空間に入る【写真4、5】。

D…グロッタの両側には、上部へアクセスするための階段が設けられている。軸線から離脱する【写真6、7】。

E…軸線上の階段が背後から再び始まる【写真8】。

F…噴水のある明るい広場に出る。鳥小屋の下層部分が姿を現す【写真9】。

G…対の鳥小屋を回り込むようにして、最上部のテラスに向かう【写真10、11】。

H…鳥小屋の背面に出る。正面と同一の意匠が繰り返されている【写真12、13】。

I…最上段のテラスのバルコニーに到着する。二つの鳥小屋は、眺望に向かって開くように斜めに配置されている【写真14】。

J…バルコニーの端まで進むと、フォロ・ロマーノの風景がパノラマに広がる。右手にはコロッセオが見える。ここからは、フォロの古代ローマ建築のみならず、背後の都市ローマ、そして遠くのアルバーノ丘陵まで見渡せた。この眺望の軸線は、マクセンティウスのバシリカの背後に広がっていた【写真15、16】。

K…一番下の正門に向かって下りていくと、ジャルディーノ・セグレートに自動的にアクセスできる。上りと下りのルートは交差しないようになっている。

L…ジャルディーノ・セグレートに下りるための斜路を進む。

M…ジャルディーノ・セグレートに到着する。カンポ・ヴァチーノに沿った壁には小さな窓が開けられ、そこから外の景色を覗くことができた。正門からは隠された2つの螺旋階段を下り、テアトロに戻ってくる。

まとめ

オルティ・ファルネジアーニでは、眺望は古代の遺跡を観察し楽しむことを目的に設計された。一連のシーケンスは遺跡に背を向けてテアトロの門をくぐるところから始まり、軸線に導かれて展望台へと上っていき、一对の鳥小屋の間のバルコニーからバシリカを振り返って眺める形でクライマックスが設定されている。

立体的なルートの中で、ジャルディーノ・セグレートのレベルを体験者は通過しているが、その存在は背後に巧妙に隠されているために気づかない。決して広くない敷地の中であって、遺跡は時にヴィラと一体化し、時にヴィラからの視対象として浮き上がる。

ヴィラ・ジュリアと同じく強い主軸線が設定されているが、そこから離脱する瞬間には垂直移動、方向転換、視界の劇的な変化が組み合わされ、いっそうの緊張感が生じる。このヴィラは、もはやヴィレッツォ・ジュリアを体現するための住機能はなく、風景を統合するための高度な舞台装飾的技法が随所に仕掛けられていることがわかる。

都市構造に適応する「風景の統合」

これまで、5つのヴィラについて、シーケンスを中心にその眺望システムを紹介してきた。

トスカーナでは、谷を挟んで点在するヴィラ同士のシーケンスが



写真4 グロッタ入口

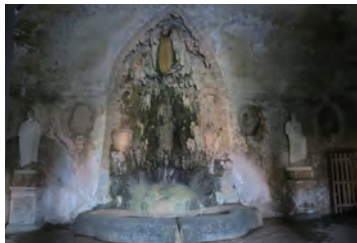


写真5 グロッタ内部



写真6 グロッタから離脱する階段



写真7 広場への細い通路



写真11 展望台に至る階段②



写真12 鳥小屋①



写真13 鳥小屋②

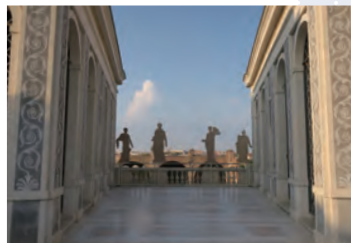


写真14 バルコニー

ブルネレスキのクーポラへのパノラマ眺望を介して呼応するかたちで、トスカーナというランドスケープ全体の統合が視覚的のみならず意識的に行われていた。

一方ローマでは、都市全体を舞台とした教皇の活動の中で、ヴィラからヴィラへと教皇が移動することによって、都市内の長大なシーケンスが発生した。ヴァチカンのコルティール・デル・ベルヴェデーレに代表される眺望による所有の表現としてのパノラマに対する、ヴィラ・ジュリアの空への眺望のような、対比関係が存在した。

ローマのヴィラでは舞台装置的な都市風景の演出がみられ、これはミケランジェロの3つの軸線をはじめとする都市骨格の上に初めて成立しうるものであった。また近郊のカブラローラでは、ヴィラ・ファルネーゼにみられる、都市ローマへの直接的な眺望を補ってあまりうる、地形全体を使った無限に連続する軸線のような舞台装置も生まれた。

フィレンツェとローマ、2つの都市にみられる「風景の統合」手法は、それぞれの都市構造に対応した眺望のあり方によってシーケ

ンスが演出された。どちらも、ヴィラと庭園内部のシーケンスの関係が高度に構造化された結果、都市や風景と連動し、スケールを横断する広大な領域性を獲得したのである。

写真2～16……大島碧撮影

のぐち・まさお

1954年東京生まれ。東工大建築学科卒業。AAスクール大学院留学後、東工大大学院修士課程修了。1981年からフィレンツェの設計事務所勤務、1983年からフィレンツェ大学都市・地域研究科留学。1995年博士(工学)。2008年から現職。専門はイタリア都市・建築史

おおしま・みどり

1987年東京生まれ。東京藝術大学建築科卒業。同大学院在学中にミラノ工科大学建築社会学部に留学、2014年修了。隈研吾建築都市設計事務所を経て、2020年東京大学工学系研究科建築学専攻博士後期課程修了、博士(工学)。2018年から現職。風景研究所共同主宰

自習型認定研修の設問

設問1

オルティ・ファルネジアーニの特徴として正しいものはどれか。

- a. 一時的ではなく常に住むためのヴィラであった。
- b. 居住機能のないヴィラであった。
- c. 教皇の夏の住処としてのヴィラであった。

設問2

オルティ・ファルネジアーニにみられる建築的要素として正しくないものはどれか。

- a. 軸線上にあって体験者を展望台へ導く斜路
- b. 半円形のテアトロ
- c. 高名な建築が引用されたファサード



認定教材の設問への回答は、CPD 情報システムのページ <https://jaeic-cpd.jp/> にアクセスのうえ、お願い致します。

※不正解の場合は、単位に登録できない場合があります。

※自習型教材の選択欄における会誌「建築士」選択項目は、平成28年1月より建築士会会員のみの表示項目になります。